ESSAY

余暇とゆとり

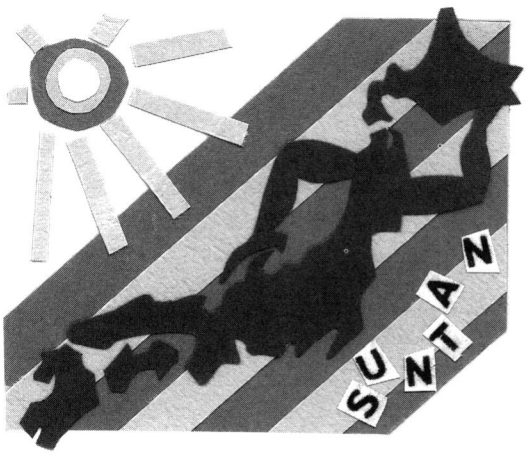
松村　みち子
（タウンクリエイター）

新幹線の車両に子連れが多いな、と思ったら学校の夏休みが始まったのだった。近ごろは休みの取り方も少し様変わりしてきたようだ。例の民族大移動（お盆の帰省ラッシュ）にしても、新幹線や高速道路にはかつてのようなひどい混雑は見られなくなった。休みをずらせて帰省したり、長期休暇を取って海外に脱出する人たちが増えたせいだろう。

とは言っても休日の交通渋滞が解消されたわけではなく、休みの日には相当なノロノロ運転を覚悟して出かけなければならない。この国では基本的には皆が一斉に同じ時期に休みを取る傾向がある。通産省の外郭団体である余暇開発センターが6月25日に発表した「柔らかい時づくりをめざして」という企業の休暇制度に関する報告書によると、夏期休暇を一斉に取る企業72％のうち、お盆を挟む週に休暇を設定している企業は78％にも達しているそうだ。休暇の集中に伴う予約難と混雑の結果、①ゆとり感の喪失、②割高なピーク料金の存在、③サービス水準の低下、という三重苦が発生する。これが国民のゆとりと豊かさを阻害する要因になっていると、同報告書は指摘している。

休暇の集中により行楽地と周辺道路が人と車で埋まってしまうだけならまだいい。日本という国はなぜかレジャーもブーム化する。しかもやたらに金がかかる。ゴルフだって、もしも低料金で誰でも手軽に楽しめるスポーツだったら、これほどのブームになったかどうか……レジャーとは何も遠くに出かけて高い金を払ってするものではないはずなのだが、現実にはプランを練って施設の予約をしてから出かけないとなかなか思うようには遊べない。そのためかどうか、余暇時間・休日の過ごし方というアンケート調査で、必ず上位に出てくるのが「テレビを見たりビールを飲んでぼんやり過ごす」という回答。諸外国に比べてこういう回答が多いことにはちょっと考えさせられる。

何でも「欧米に追いつき追い越せ」の時代でもない。余暇とゆとりもまた欧米が手本という考えは捨てたい。日本人には日本特有の遊び方、余暇の過ごし方があってもいいとは思う。それにしても、わが国には日常的に気軽に遊べるところがあまりにも少ない。たとえばダム湖の湖面、都市公園の中、こういうところは利用規制がされていて、ダム湖でボート遊びをしたり、公園の中でキャンプファイアーなどはできないことになっている。



公園の建ぺい率をもう少し上げて気の利いた施設でも建てれば、野外バーベキューなんぞして地域のコミュニティーの場にもなるだろうに（最近は諸規則の見直しがされているとも聞くが）。

今ほど生活が豊かでなかった時代の人たちがゆとりもなく遊び下手だったかといえば、川柳、狂歌、俳句の世界を見るまでもなく、ユーモアもセンスもあり、豪快な遊び人もちゃんといた。モノとカネによる豊かさ・ゆとりは既に手中にありながら、心が貧しいと非難される日本人に欠けているのは、よりよく生きようとする姿勢と社会性（ボランティア精神？）ではないだろうか。もちろん個性的に生きている人も多いが。余暇の活用次第で、ゆとりの意識構造は大きく異なってくるに違いない。

アフリカの祭りと黄金海岸のいせえび

稲村　博
（筑波大学助教授・精神医学）

もう大分前のことになるが、教育協力のため私はアフリカに滞在した。西海岸のナイジェリアを中心に、熱帯アフリカを広範囲に動き廻り、教育や実習の他に、医学的調査はもとより、宗教、文化、心理に関するさまざまな調査や研究を行った。相当な危険が伴ったため、よくまあ五体満足で帰れたものだとつくづく思う。何度も危ない目にあったが、その一つは交通事故である。とくにナイジェリアでは国内の主なところはほとんど走ったが、産油国ということもあって道路は比較的発達し、そこをみな猛スピードで走っている。事故が起きるのは当然で、大げさにいえば、道路の両側に打ち捨てられた車の残骸が、まるで並木のように累々と連なっている。それでも昼間はまだよいが、夜ともなると曇天の日など真の闇となり、そこへ大人も子供も裸で道路を横切り廻る。家畜までみな黒いのである。闇夜に烏のたとえ通り、何が起きるかわからないわけで、本当に危ない思いを何度もした。

もっとも、このエッセイでは、そんな物騒な話は避けて、もっと楽しい思い出を述べたいと思う。いろいろあるが、思い出すまま二つだけを紹介する。一つはお祭りのことである。いろいろな祭りを見て廻ったが、印象に残っているのは人を自由に叩ける祭り（名は失念した）である。これは、古都イフエの郊外で今でもあるのだが、祭りの期間は老若男女全く無礼講で互いに誰を叩いてもよいのである。もちろん、それにはルールがあり、わが国の柳のようなしなやかな枝木に限られ、それを何本か束ねて叩く。ちっとも痛くないのである。近所の人同士はもとより、通行人、私どものような外国人の区別はなく、片っ端から叩いて廻る。若い女性など嬌声をあげては逃げまどい、逃げながら誰かを叩くというふうで、その地域一帯が実に楽しく、まさにお祭り騒ぎを夜までやっている。物好きにも車で見物に行った私も、誰かがくれた枝木をもって、まさに国際交流の叩き合いをひときわ熱心に演じた次第である。

こんなことを書くと、野蛮で暴力的な土地柄と思うかもしれないが、実はアフリカは全く逆である。日頃、人が殴り合いとか、親が子供を叩く場面など、私は滞在中一度も見なかった。口では大声で論じ合い、罵ったりもするが、暴力は絶対にふるわない。だからこそ1年に1回、自由に人を叩ける祭りなどがもうけられているのであろう。アメリカの黒人とは違う、ルーツ・アフリカの実態に目を開かれる思いがした。

もう一つは、黄金海岸のご馳走のことである。私が居たのは、ほとんどイギリス系の旧植民地国であったのと、食物の素材の乏しいところであったので、現地の食事にはさすがに参っていた。そんなある時、ナイジェリアから、黄金海岸沿いに数カ国を車で走り、コートジュボアールまで行ったことがある。そのとき、途中のドーゴで海辺のきれいなホテルに泊まったが、そこは久しぶりに旧宗主国仕込みの本格的なフランス料理が楽しめた。地獄に仏の心境でご馳走を堪能したが、その圧巻は何といってもいせえびであった。あんなに大きくて、しかもあんなに美味なのは初めてだったが、まず、雄大な半身が出され、これだけで満腹して終わったと思っていたら、料理人がうやうやしく、もう半身を運んできた。うれしい悲鳴を上げたが、その日は、実に久しぶりに腹が張って動けないまま寝て、アフリカは天国だとつぶやいた次第である。